学校週５日制と子どもの教育

大　桃　伸　一

A shorter School Week and Child Education

Shin'ichi Ohmomo

1　学校週５日制への動き

学校週５日制への動きが急速に強まっている。まず、今日にいたるまでの学校週５日制をめぐる動向をふりかえってみたい。

戦後教育改革期に占領軍の指導に基づいて、全国20以上の地域で学校週５日制は行われていた。しかし、これは主として新しい教育に対応するための教員の現職教育の必要上からのものであったため、その必要性がなくなるにつれてしだいに消えていった。

学校週５日制の問題が再び浮かびあがってくるのは、70年代になってからである。文部省は、公務員の週休２日制との関連で学校週５日制実施の可能性を探ることになった。しかし、この時は、教育水準の低下や社会教育施設の不備を心配する意見や、財政的理由をあげる財政当局の反対などにより、「時期尚早」ということになった。これに対して日教組は、1973年、「今日の教育現実を全面的に改革し改善するための重要課題の一つ」として学校週５日制の実施を要求し、強力な運動を展開していくことを決めた。

80年代になると、日本人の働きすぎが国際的な問題となり、これを受けて労働時間を短縮する動きがしだいに高まっていく。そして、国は労働基準法の改正を行い、労働時間を週40時間に引き下げる方針を明らかにした。その結果、週休２日制に移行する状況が社会全体として生まれてきた。

こうしたなかで、臨時教育審議会は、「教育改革に関する第二次答申」（1986年４月）においてこの問題をとりあげ、次のように述べている。

「学校外の学習の場の整備を進めるなど、家庭や地域の教育力の回復と活性化を図り、教育の機能が全体として低下しないよう十分留意しながら、週休二日制に向かう社会のすう勢を考慮しつつ、子どもの立場を中心に家庭、学校、地域の役割を改めて整理し見直す視点から、学校の負担の軽減や学校の週５日制への移行について検討する」

臨時教育審議会は、87年４月の第三次答申、87年８月の第四次（最終）答申でも、生涯学習とのからみで新しい学校のあり方として学校週５日制を提示している。また、教育課程審議会は、1987年12月の答申のなかで、学校週５日制の導入について「総合的に検討を行った」結果、「学校週５日制をいつからどのような形態で導入するかについては、実験校を設けるなどして調査研究を進め、その結果を勘案しながら結論を出すのが適当である」としている。

こうした提言を受けて、文部省は、1988年１月に「青少年の学校外活動に関する調査研究協力者会議」を、また、89年８月には「社会の変化に対応した新しい学校運営等に関する調査研究協力者会議」を発足させた。そして、89年12月には学校週５日制調査研究協力校を指定し、1991年度まで研究を行うこととなった。指定された学校は９都県、68校である。研究内容は「月１～２回の土曜日を休業日とする学校週５日制を実施する場合の教育課程の在り方、学校運営の在り方、学校外における幼児児童生徒の生活環境や生活行動への対応の在り方」などである。

文部省は91年８月、調査研究協力校の保護者アンケート調査の結果を公表した。それによると、学校週５日制の研究を始める前には、図表１のように週５日制に「反対」が51%、「賛成」が41%であったのが、１年間実施した後には、「反対」は２割足らずに減って、「賛成」が48%,「条件付き賛成」が31%となり、父母等の意識が大きく変化していることが報告されている（但し、この調査は週５日制実施前と実施後とでは設問が少し違うことに注意する必要がある）。

人事院は91年８月、「国立大学付属学校の教員については学校５日制の調査研究を踏まえ」1992年度のでき

図表1　学校5日制についての考え方

区分	問1　研究を始める前					問2　研究を1年間行った後				
	①賛成	②どちらかと言うと賛成	③どちらかと言うと反対	④反対	⑤分からない	①毎週実施に賛成	②月一～二回実施に賛成	③条件が整えば賛成	④反対	⑤分からない
計	15.8	25.0	37.2	14.1	7.6	13.0	35.0	30.7	18.5	2.4
	40.8		51.3		7.6	48.0		30.7	18.5	2.4
幼稚園	10.3	25.0	40.1	13.6	10.5	9.4	37.2	31.4	17.8	3.5
	35.3		53.7		10.5	46.6		31.4	17.8	3.5
小学校	12.8	22.6	40.9	15.8	7.1	9.6	35.0	32.9	19.7	2.0
	35.4		56.7		7.1	44.6		32.9	19.7	2.0
中学校	15.2	23.3	39.9	14.3	7.3	10.0	35.7	32.3	19.9	2.1
	38.5		54.2		7.3	45.7		32.3	19.9	2.1
高校	23.6	30.6	29.6	9.0	7.1	22.7	34.2	27.3	13.9	1.8
	54.2		38.6		7.1	56.9		27.3	13.9	1.8
特殊教育諸学校	14.7	22.4	31.7	24.1	7.1	13.3	31.3	24.9	25.5	5.0
	37.1		55.8		7.1	44.6		24.9	25.5	5.0

（「内外教育」1991．8．13）

るだけ早い時期から実施するように勧告している。また、それまで学校週5日制に慎重な態度をとってきた日本PTA全国協議会も、同年9月に「学校週5日制・学校外活動などの論議促進について」の提言と「学校外活動の充実方策」に関する報告書を発表し、学校週5日制に前向きな姿勢を打ち出した。

こうしたなかで文部省の初等中等教育局長は、10月2日、自民党の「学校5日制に関する小委員会」において、学校週5日制を92年2学期から月1回段階的に実施することも可能であることを発表した。そして、12月19日、「社会の変化に対応した新しい学校運営等に関する調査研究協力者会議」の「中間まとめ」が出された。そこでは、学校週5日制についての基本的な考え方が示された後、「まず第1段階として月に1回の土曜日を休業日とする学校週5日制を導入することが妥当であると考える。また、その導入の時期については、関係者への周知やその準備の状況などを勘案しながら、平成4年度中に導入するのが適当である」と述べられている。

2　学校週5日制のとらえ方

このように学校週5日制への動きは今日社会のすう勢となっているが、子どもの立場を中心に、とりわけ、近年の子どもをめぐる状況の変化をふまえながら、学校週5日制の問題をとらえていく必要がある。

今日のわが国は国際化、情報化、高齢化、価値観の多様化など社会の変化が急速に進んでおり、わが国をとりまく世界の状況もまた激動の時代である。こうしたなかで、子どもは、現在及び将来を主体的にしかも心豊かに生きていくことのできる資質や能力を身につけることが求められている。

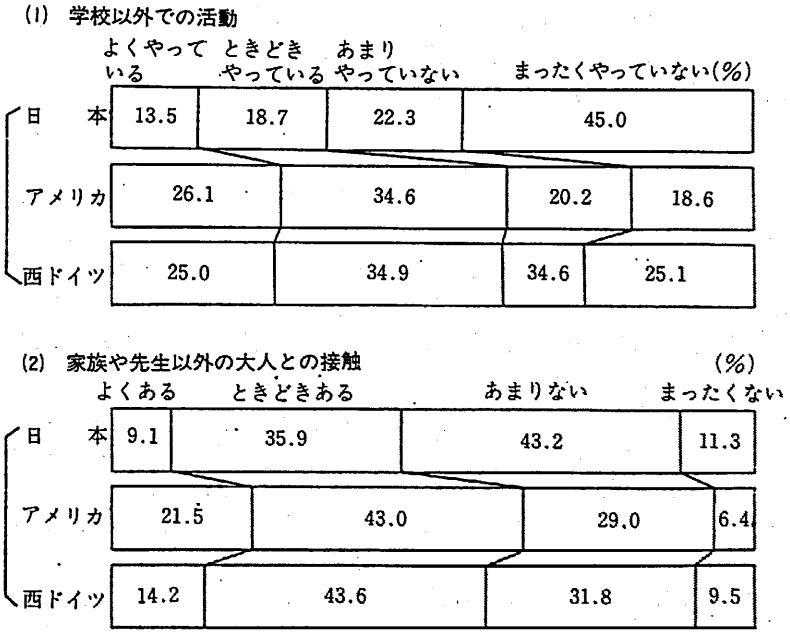
子どもは、自由で伸び伸びとしたなかで、自主性や主体性を身につけて豊かに育っていく。しかし、現代の子どもたちは概して忙しく、あたえられたプログラムを消化するために時間に追われてゆとりを失っている。日本学校保健会「疲労と休養委員会報告書」(1988)によれば、「いま最もやりたいこと」として中学生の約3人に1人が「もっと寝たい」と答えており、「のんびりしたい」「もっと遊びたい」など「ゆとり」を求める訴えが上位を占めている。

このように子どもからゆとりを奪っている最大のものは偏差値教育と受験競争である。わが国の教育は、「教育即学校教育」、「学校教育即知識中心」の傾向が強く、学校でよい成績をとり、少しでも偏差値の高い上級学校に行くことが社会的にも有利なパスポートの獲得につながるという考え方が根強い。そのため、子どもは家庭に帰ってからも学校の勉強に追われ、塾や稽古ごとに駆り立てられる。総理府「学校教育と週休2日制に関する世論調査」(1986)によれば、学校の授業や塾・稽古ごとなどで今の子どもは自由時間が「少ないと思う」と答えた親は、57%と過半数を超えている。

こうした教育が子どもの心に大きな影を落としている事例はあまりにも多い。瓜生武他『学校内暴力・家庭内暴力』(1980)によれば、家庭内暴力をおこしたある中学3年生は「学業成績と経済力の2つの尺度以外に人間の価値を考える基準なんて思いつかない」と答えているし、ある中学2年生は「『勉強しなさい。頑張らなくてはいい学校に行けない』という言葉をきくとぞっとする」と言っている。テスト・受験・進路選択をめぐって発生した非行、登校拒否などは急激に増え、中学2年生の意識調査では、「自分も時々自殺したくなる」(5.7%)、「何となく自殺する人の気持ちがわかる」(43.9%)となっており、子どもはゆとりを失っているだけでなく、追いこまれてもいるのである。

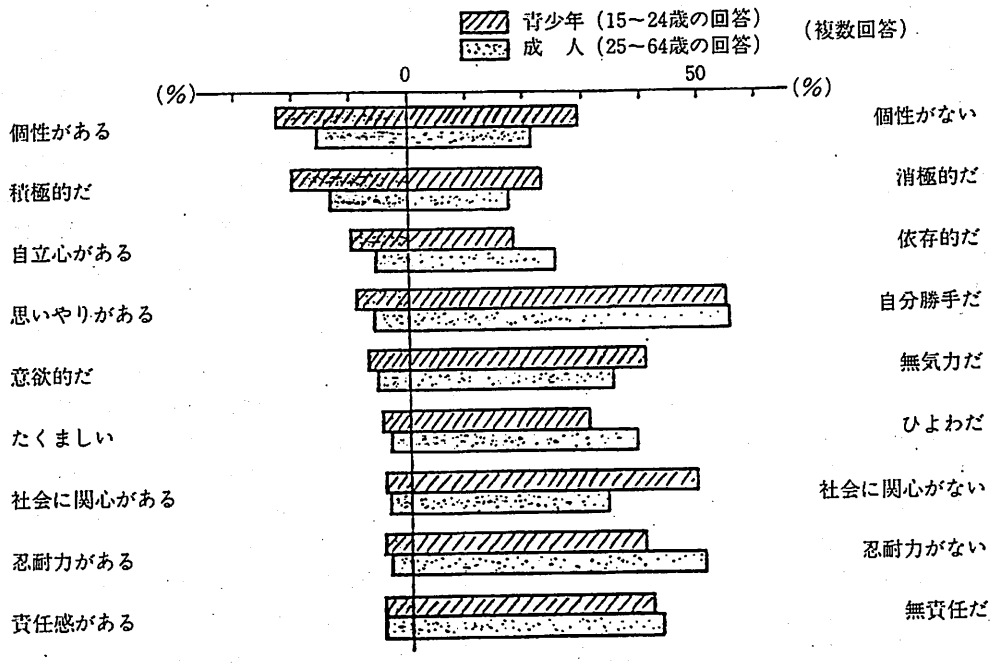
子どもはまた、学校だけでなく学校以外の場において多様な価値と出会い、さまざまな体験をしながら心豊かに育っていく。たとえば、自然のなかでのレクリエーション活動や社会参加としてのボランティア活動を通して、自然の厳しさやさまざまな人々の生き方を知り、自然の尊さや人間の尊厳性について学んでいく。異なる年齢の友だちと遊んだり地域の行事に参加することによって、社会のルールや人間関係の基本を学んでいく。

しかし、総務庁「子供と父親に関する国際比較調査」(1986)によると、図表2のように、学校以外での活動を「まったくやっていない」子はわが国では45%もいる。これに「あまりやっていない」子を加えると67%にも達し、3人に2人が学校以外における活動をほとんどやっていないのである。これは他の先進諸国に比べてきわめて高い数字である。また、家族や先生以外の大人との接触も、わが国では「あまりない」と「まったくない」を合わせると55%と過半数を超えている。わが国の子どもは家庭や地域社会での活動やさまざまな人々とのふれあいがきわめて不足していると言わなければならない。こうしたことの背景には、都市化や



図表2 学校以外での活動
(総務庁「子供と父親に関する国際比較調査」1986)

図表3　青少年の特徴を言い表す言葉
（総務庁青少年対策本部「青少年の活力に関する研究調査」1984）



核家族化など高度経済成長以降の家庭や地域をめぐる急激な変化がある。しかし、わが国の教育が学校教育に過度に依存してきたこともあげられよう。

総務庁青少年対策本部「青少年の活力に関する研究調査」(1984) によれば（図表3）、現代の青少年の特徴を言い表わす言葉として、「自分勝手だ」「社会に関心がない」「忍耐力がない」「無責任だ」「ひよわだ」といったものが上位にあげられている。また、基本的生活習慣や生活技能が十分に身についていない状況もみられる。

子どもは家庭、学校、地域社会のなかで育つものである。青少年期において豊かな人間形成を図るためには、従来の学校教育のみに依存しがちな教育に対する考え方を根本的に改める必要がある。そして、子どもの遊び、手伝い、ボランティア活動、スポーツやレクリエーション活動など、自然とのふれあいや社会体験などのもつ教育的価値を見直す必要がある。

家庭や地域社会での豊かな生活経験、自然体験、社会体験は、学校での学習を支える基礎ともなり、知識偏重の学力観を変えていくことにもつながる。これからの変化の激しい社会に主体的に対応し、しかも心豊かに生きていくことのできる子どもを育てるには、これまでの知識の伝達を中心とした教育から、子どもが自ら考え自らの経験を通して判断し責任をもって行動できる資質や能力を育てる教育へと、学校教育の基調を変えていくことが必要である。学校週5日制はこれまでの学校教育のあり方を変えるとともに、学校に過度に依存してきた教育観を転換し、家庭や地域社会における教育のもつ意味と役割を考え直す大きな契機とならなければならない。

3　家庭教育の充実

家庭は人間が成長発達していくうえで最も基本的な教育の場であり、家庭での教育はすべての教育の土台となる。しかし、現在、家庭における教育力の低下が大きな問題となっている。総理府「家庭と地域の教育力に関する世論調査」(1988)によれば、20歳以上の人の63%が「家庭のしつけや教育力が低下している」と答えている。その原因はさまざまであろうが、ここ20～30年の家庭や地域をめぐる状況の変化も大きく関係していると思われる。

わが国では高度成長期までは人々の多くは、農業や商業など、その土地と密着して生活してきた。そして、仕事を通して互いに結びつき、支え合って生きてきた。しかし、高度経済成長にともなう産業構造の変化のなかで、都市化、サラリーマン化が進み、家庭は地域という大地のひろがりから切り離されて、「植木鉢」のよ

うに一つ一つ孤立して他とのつながりをなくしてしまっている。

以前、「親はなくても子は育つ」といわれたのは、子どもの周囲にたくさんの親のかわりをする人がいたからである。仲人さんは親がわり、親戚をはじめ地域の人々がそれぞれ、その子の育ちに関心をもち、その子の成長を見守ってくれた。子どもが親の手にあまれば、かわって叱ってくれたり、とりなしてくれた。子どもが良いことをすればほめてくれた。そこには、「子どもは社会の宝、みんなで育てるもの」といった考え方があった。それが急激に変化し、うっかり他人の子どもに立ち入ったりすると「プライバシーの侵害」ときめつけられかねず、実の親以外は誰もその子に関心をよせなくなってきている。

また、子どもはかつて家庭も学校も包みこんだ大地のひろがりのなかで生活していた。幼児期中頃から遊び仲間のグループに入り、地域の活動や行事にも積極的に参加していた。そうしたなかで子どもは、諸々のことを学びながら自立をはかり、社会性を身につけていったのである。しかし、異年齢の仲間集団がみられなくなり、地域の行事が活力を失っていくなかで、子どもは地域での生活を急速に失いつつある。

子どもが大地のひろがりのなかに立っていれば、水の多少はあまり問題ではない。大地がうまく調節してくれるからである。しかし、植木鉢のなかでは水の与えすぎは根腐れをおこしてしまうし、水が不足するとすぐに枯れてしまう。植木鉢化した家庭のなかでは、愛情や干渉の多少は直接に子どもに影響し、過保護からくる自立能力の喪失や放任による問題行動などとなってあらわれる。本来ほほえましい親子関係も植木鉢化した家庭のなかでは時ならぬ歪みをもたらすのである。

植木鉢化した家庭のなかをみると、核家族化と少人数化が急速に進んでいる。子どもの数も少なくなり、１人あたりの女性がうむ子どもの数は1991年には1.53人に減少している。こうしたことは子どもの社会化や人格形成に少なからず影響を与える。祖父母がいないということから、子どもは人生経験豊かな考え方や知恵を学ぶことができなくなる。きょうだいの減少は、きょうだいを通して多様な友だち関係をつくり出して行くことを困難にする。そして、何よりも家庭にあって多様な人間関係のなかに身を置き、役割を取得したり、対人関係を学んだりすることが難しくなる。友だちのいない子、友だちと遊べない子が増えているのは、こうした家庭の状況と必ずしも無関係ではない。

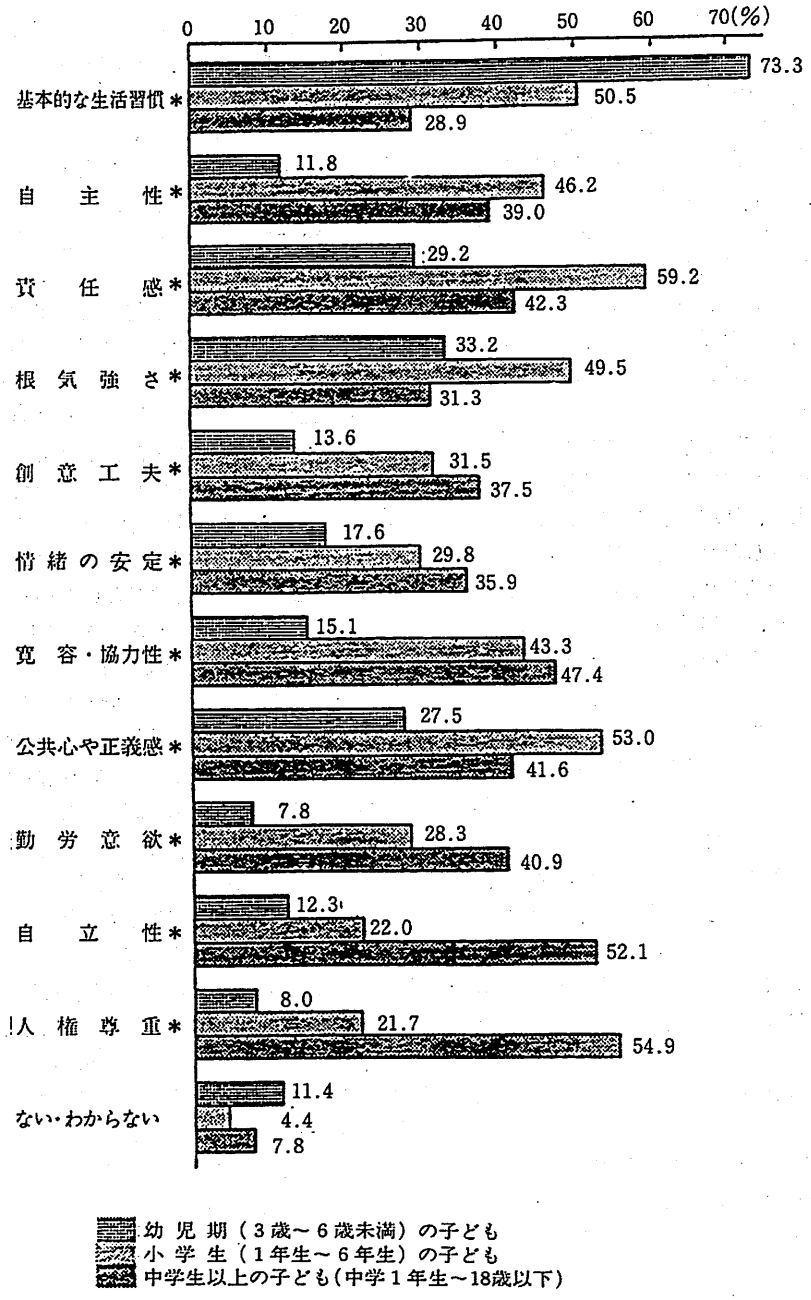
三世代家族においては、母親はまた、豊かな経験をもつ祖父母から育児の知恵や方法を具体的に直接に学ぶことができた。子育ては人間の歴史とともにあり、祖父母の背後には人々が長い間築きあげてきた子育ての文化やわざがあった。しかし、核家族化はそうした育児の伝承を多分に困難にした。

さらに、第１次産業から第２次・第３次産業へという産業構造の変化は、家庭と労働の場を分離してしまった。かつて子どもの目前で働き、生きるための知恵とわざを具体的に教えてくれた父親の姿はみられなくなり、そのほとんどが家庭を離れて働く被雇用者となった。しかも、多忙な父親は朝早くから夜遅くまで長時間家庭を不在にし、長期出張、単身赴任といった形態も生まれた。父親は労働を通しての権威や指導性を子どもに示しえなくなったばかりでなく、時間的物理的にも不在がちになってしまったのである。

東京都教育委員会「教育に対する親の意識調査」（1980）によれば、子どもの教育に自信があると答えた親は14％しかなく、自信がないという親は小・中・高校を通じて30％前後もみられる。そして、「家庭でなすべきことを学校に任せている」と感じている親が70％前後もいる。しかし、1990年の総理府「家庭教育に関する世論調査」で、「『今後の社会では家庭教育の役割はますます重要になる』という意見があるがそう思うか」と尋ねたところ、89％の人が「そう思う」と答えており、「そうは思わない」と回答した人は５％にすぎなかった。そして、その理由としては、「子どもの人格を形づくる上で家庭は大きな影響を与えるから」（87％）が最も多くあげられており、「子どもの教育は学校だけにまかせておけないから」（37％）がこれに続いている。また、同じ調査で、家庭で子どもに身につけさせるべき大切なこととしてあげられているのは、図表４のとおりである。幼児期においては、「基本的な生活習慣」が73％ときわめて多い。これに対して小学生では「責任感」「公共心や正義感」「根気強さ」などが多くあげられ、中学生以上では「人権尊重」「自立性」「寛容・協力性」などが上位を占めている。家庭ではそれぞれの発達段階に応じたこうした課題をきちんと身につけさせることが必要であろう。

現在、わが国では週休２日制が急速に進んでいる。企業のなかでも、「親を家庭に返す」という観点に立って経営管理を行うところも生まれてきている。学校も週５日制になれば、親子ともに生活にゆとりができ、親子のふれあいをつくり出す時間も多くなる。子どもは家庭において親と一緒に過ごすなかで生き方を学ん

図表4　家庭で子どもに身につけさせるべき大切なこと
（20歳以上70歳未満の者3.161人に、複数回答）



（総理府「家庭教育に関する世論調査」1990）

だり、豊かな生活経験をすることによって自己実現をはかっていく。子どもは基本的には親子の愛情あるふれあいを通して人格を形成していくという認識をしっかりともち、親子のふれあいをつくり出していくことが大切である。そのためには、家族で旅行やキャンプ、スポーツや芸術・文化活動ができる場や施設の整備が求められよう。

学校が週5日制になっても、学歴偏重の教育に固執する親がいれば、子どもを机にしばりつけ、学習塾通いが逆に増加するかも知れない。子どもの健全な成長

発達のためには、今何が不足し何が求められているかということをみんなで十分に考える必要がある。

また、厚生省「子供と家庭に関する実態調査」(1988)によれば、親の64%が子育てについて悩みごとがあると回答している。核家族化が進み、地域における人間関係が稀薄化しているなかで、そうした悩みや心配ごとなどを相談できる人がいない状況もみられる。子育てについての基本的な知識や態度の欠落している親もみられる。乳幼児期から青年期までの子どもをもつ親等に対する継続的で体系的な教育の一層の振興が必要である。

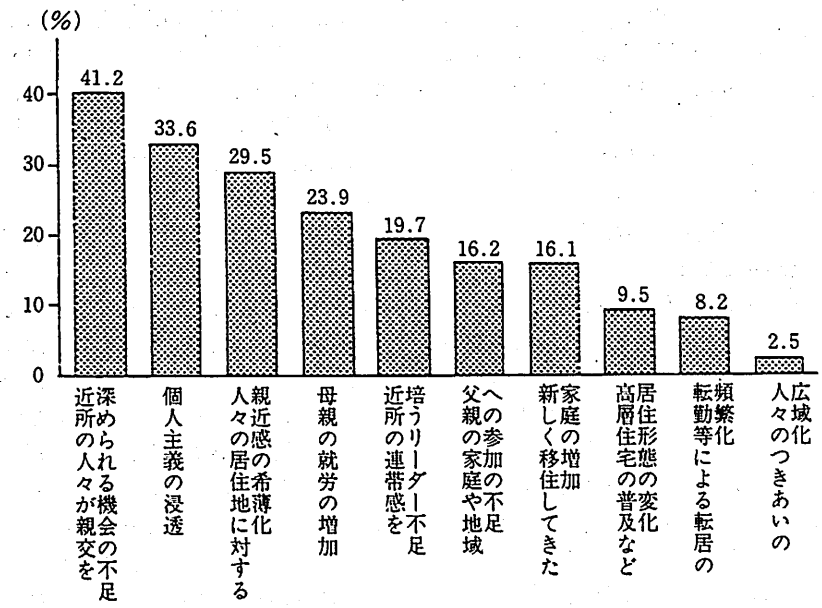
4　地域社会の教育力の活性化

家庭の延長線上にある地域社会は、子どもにとって生活の拠点であるとともに、大切な学習の場である。子どもは地域のなかで、自然にふれたり、子ども同士遊んだり、青少年団体の活動に参加したり、地域の祭りや行事に参加したりすることを通して、自立の精神を養い、社会性を身につけていく。また、地域のなかにある公民館、図書館、博物館、児童館等の施設での活動は、学校では得られない学習の機会ともなるし、あらたな自己発見をもたらしたりもする。さらに、地域には同年齢や異年齢の友だち、成人、高齢者、年少者、障害者など、さまざまな人間が住んでいる。子どもはそうした人々との交流を通して多様な価値にふれ、さまざまな生き方を知るとともに、好ましい人間関係を学んでいく。

しかし、現在、他人の子どもが悪いことをしても知らん顔をしているなど、地域の教育力の低下が大きな問題となっている。総理府「家庭と地域の教育力に関する実態調査」(1988)によれば(図表5)、「よその子供に対するしつけや教育」などが活発でない理由として、「近所の人々が親交を深められる機会の不足」「個人主義の浸透」「人々の居住地に対する親近感の稀薄化」等があげられている。

「子どもは地域の宝、みんなで育てるもの」というかつての言葉の背景には、「子どもは親だけでは育てられない」という考え方があった。親子の場合、どうしても私情や甘えが入りしつけなどが適切におこなえなかったり、子どもは小さい頃からさまざまな人々と接し、多様な人間関係のなかで育てられなければならないという基本的な認識がそこにはあった。核家族化し少人数化した今日の家庭では、このことは特に重要である。各家庭が日常的な交流を深め、互いに協力し合っていくことが望まれる。

図表5　よその家の子供に対するしつけや教育、大人と一緒の行動が活発でない理由
(「あまり活発でない」、「不活発」と答えた人に、複数回答)



(総理府「家庭と地域の教育力に関する実態調査」1988)

最近、地域の人々が共に声をかけ合う「オアシス運動」や近隣の子どもに声をかける「ひと声運動」がおこなわれるようになってきた。子どもが地域のなかで経験したさまざまな発見や疑問に対して、まわりの大人が適切に対応していけば、正確な知識や豊かな情操にまで育っていく。大人のちょっとした配慮や働きかけが、非行の防止にもつながる。子どもが健全に、豊かに育っていけるために地域の人々が協力して環境づくりに取り組んでいくことが必要である。

子どもはまた地域のなかで、友だちを求めて仲間集団をつくりあげていく。この仲間集団は子どもの発達とともにその性格をかえていくが、子どもはそのなかで、他人を理解し互いに協力し合うこと、集団のルールや規範をつくりそれに従うこと、仲間をリードしたりフォロワーとして集団を支えること等を学び、社会的人間として育っていく。子どもは家庭や学校においても社会化されるが、仲間集団を通してのそれは、権威者である親や教師に従ったり教えられたりすることによってではない。子どもは自由な世界のなかで、自発的にそれらを学びとっていくのである。同時に、仲間との遊びや活動を通して、子どもは身体的な発達や運動機能の発達がうながされ、知的能力がまし、豊かな情操やくじけずにがんばるといった意志なども育っていく。子どもの全面的な発達にとって、仲間との自由な遊びや活動はなくてはならないものである。

こうした価値をもつ仲間集団は、急速に変容し弱体化している。異年齢の仲間集団はほとんどみられなくなり、集団規模は縮小して等質化し、結合力も弱まっている。学校週5日制は、子どもが地域のなかで友だちとの遊びや活動をつくり出していく契機とならなければならない。

そのためには、子どもが自由に遊べる場や空間が十分に確保されなければならない。現在、子どもの遊び場として公園などの整備が進んでいるが、そこにはありふれた遊具しかなかったり、「砂場では水を使用してはいけない」というようにその使い方の制約があったりして、必ずしも子どものためのものになっていない状況もみられる。他方、親や地域住民が参加してつくった「プレーパーク」や「わんぱく広場」等も生まれ、注目されている。これからは、都市計画や街づくりなどにも、「子どものための視点」が十分に取り入れられることが求められる。また、子どもの遊びの援助者であるプレイ・リーダーの育成も必要となろう。

学校週5日制になると、各種青少年団体や子どもサークルの役割がますます重要となってくる。地域子ども会は、行政の支援も受けて、かつてはかなり活発に活動を展開していた。しかし、今日、その活動は年に数回のいわゆる「行事的活動」にとどまり、活動内容のマンネリ化や指導の形骸化もみられるところも少なくない。遊びの伝承や冒険の復活、自治的能力の育成、共同作業や社会奉仕の経験、そして何よりも子どもたちの地域における生活の充実といった観点から子ども会の意義が改めてみなおされ、その活性化がはかられなければならない。また、従来の地域子ども会とは別に、小学校、中学校の通学区域を1つの区域とする青少年団体とその育成組織を新たに設けることも必要となろう。育成組織は、主としてPTAや地域のボランティアで構成され、学校との連携をはかって、青少年団体の育成や活動に対する援助指導を行う。育成組織には、専門の社会教育関係職員を配置し、子どもの学校外活動の充実をはかることも考えられなければならない。

学校週5日制になると、さらに、既存の各種施設の再点検も必要となろう。公民館、図書館、博物館などの社会教育施設は、地域の学習活動の拠点としてさまざまな活動を展開してきたが、これまでは大人を対象とするものが中心であった。これからは子どもを対象とした企画や親子で共に参加できる活動を積極的につくり出していくことが必要である。また、地域には、動物園、植物園、水族館、スポーツセンター、園芸センター、庭園等、子どもが楽しい経験をしたり、見聞をひろめたりする各種の施設がある。現在、これらの施設は、一部子どもの入場を無料にしているところもあるが、かなり高額な料金をとっているところもある。これからは子どもの学習の場として、これらの施設は公共の場合は原則として無料とし、民間の場合でも低額におさえられるように援助がなされなければならない。

心身に障害をもつ子どもやその家族にとって、学校週5日制への移行は不安をともないやすい。そうした不安を取り除く努力に加えて、障害をもつ子どもと親が障害を乗りこえていくための条件整備を、行政と地域住民が一体となって行わなければならない。たとえば、介護などで家庭の負担が増大したりすることのないよう援助体制がつくられなければならないし、障害をもつ子どもが地域における活動に参加しやすいようにプログラムを設定したり、施設設備の整備をはかっていく必要もある。また、土曜日や日曜日に保護者が家庭にいない子どもに対する適切な手だても講じられなければならないであろう。

労働時間を短縮しようとする動きは、もはや止めることのできないものである。そして、その背景には、ひたすら働くだけでなく人間らしい生活をつくり出していこうとする価値観の転換がある。職場の週休２日制が進み、学校も週５日制になれば、家庭での生活にもゆとりができるようになる。そうすれば人々の目は、自然と自分たちの住んでいる地域社会にむけられていく。最近、若い層を中心に、職場を中心とした生活から家庭や地域社会を中心とした生活へとライフスタイルの変化のきざしがみられる。また、親や地域の人々が子どもの教育を通して結びつき、子どもの文化、スポーツ、レクリエーション活動を中心に協力し合う関係がひろがりつつある。親や地域の人々がボランティアとして、さまざまな青少年教育の分野で活動するケースもみられる。こうした動きがひろがってはじめて、地域での創造的な教育が生まれてくると思われる。学校週５日制の導入にともなって、こうした草の根的な動きを重視し、支援する方向も十分に検討されなければならないであろう。

結　　び

子どもは家庭、学校、地域社会のなかで生活し育っていく。子どもの豊かな人間形成をはかるためには、家庭、学校、地域社会がそれぞれの教育機能を十分に果たすことが必要である。学校週５日制研究協力校の調査によれば(図表６)、学校が休業日となった土曜日における子どもの様子を見てどう考えるかを保護者に尋ねたところ、「自分で学習したり、好きなことをして過ごしており、自主性を育てる上で有効である」「子供同士で遊んでおり、社会性を育てる上で有効である」「親子で一緒に過ごす時間が増え親子の触れ合いが深まった」などが多かった。

学校週５日制は、子どもが自由な時間をつくってゆとりある生活をつくり出すことを可能にする。同時にそれは、家庭や地域社会が本来もっている教育機能を回復し高める契機ともなりうる。学校週５日制への移行を契機に、家庭教育、学校教育、社会教育がそれぞれの機能を十分に発揮しつつ、相互の連携をはかっていく必要がある。

主な参考文献

○臨時教育審議会『教育改革に関する答申（第一次～第四次）』（1988．１）
○教育課程審議会『幼稚園、小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について（答申）』（1987．12）
○社会の変化に対応した新しい学校運営等に関する調査研究協力者会議「社会の変化に対応した新しい学校運営等の在り方について（中間まとめ）」（1991．12）

図表６　学校が休業日となった土曜日におけるあなたのお子さんの様子を見てどう考えるか

区分	親子で一緒に過ごす時間が増え親子の触れ合いが深まった	学校や地域の活動に参加して楽しい生活を過ごしている	子供同士で遊んでおり、社会性を育てる上で有効	地域の自然や人々と触れ合う時間が増え、豊かな人間形成に役立っている	自分で学習したり、好きなことをして過ごしており、自主性を育てる上で有効	学力が低下するのではないかと心配している	家庭でごろごろしており、有効に過ごしていない	生活のリズムが乱れがちになったよう	遊びぐせがついたよう	土曜日が休みになったことによって面倒をみる者がいなくて困っている	分からない
計	28.1	18.3	28.8	11.5	46.4	14.8	25.3	20.2	9.2	6.8	4.5
幼稚園	36.2	10.7	35.6	14.7	38.5	7.0	18.8	16.3	6.4	8.2	7.9
小学校	30.7	17.2	35.0	12.9	41.7	15.7	26.0	22.1	12.6	12.2	2.8
中学校	25.1	19.6	29.9	9.8	48.6	20.4	29.0	23.7	11.1	4.4	4.2
高校	23.7	24.6	20.1	9.4	57.4	13.8	21.3	15.4	4.6	1.2	4.4
特殊教育諸学校	29.7	10.6	14.3	13.9	34.2	5.6	33.6	21.6	7.7	9.3	7.3

（「内外教育」1991．８．13）

○青少年の学校外活動に関する調査研究協力者会議「休日の拡大等に対応した青少年の学校外活動の充実について（中間まとめ）」（1991．12）
○文部省『現代の家庭教育―小学校高学年・中学校期編』（1989．7）
○大桃伸一「家庭教育と地域・社会の教育」（天野正輝編『教育の基礎理論』所収）（1987．5）

（1992．1．16．提出）